

編集後記

編集長(ダン シロウ)

新規連載が一本、次回からの打診も一件と、相変わらず順調なマガジンの編集長です。

いよいよ次号で 50 号。記念に何か特集でもと考えそうですが、そんなことをするとみんなの負担が大きくなるので、多分何もやりません。このペースで 13 年目を迎えるまでになってきたのです。

世間とはかくイベント好きというか、お祭り好きです。でもそれをやると「祭りの後」が必ずやってきます。日常を祭りの後にしないためには、祭りをやらないことです。祭りには羨ましいところもあるのですが、日常に勝るものではありません。日常を豊かに、日々が祭りのような華やぎと充実感に充ちていればその継続は実現できます。

長寿化社会に生きる晩年を、孤独な老後などにしないための工夫は、継続という言葉の中にあるように思います。簡単にリタイヤなどを口にするから、素人高齢者になってしまうのです。サッカーのカズのように、昔のスピードやキレは無くなっても、次世代の邪魔はせず現役を続けているのは素敵です。

*

最近、「若く美しくなったソクラテス」という林竹二氏の古い本(1983年刊)を読んでいます。東北大学退官最終講義や神戸・湊川高校(定時制)での公開授業が収録されています。

私は自分が「ソクラテス・・・」などとタイトルされたものに手を出すイメージは全くありませんでした。哲学に関心を持った青年期もありません。そういう自分で特に問題なく生きてきました。

3. 11 繋がりの東北の友人達との集まりの中で、このタイトルが何度か話され耳に残りました。魅力的なひびきで、何が書かれているのか想像つかないものでした。Amazon 検索してみると古書で 4000 円以上するものばかりの中、一点だけ 500 円のものがありました。これが決め手で購入、読めなくても構わないと思っていました。

ところがこれが面白いのです。読みやすそうな湊川高校の公開授業からスタートしたのですが、線を引きたい、意見を書きたいところの山でした。繰り返し読んだ

り、「そりゃそうなるよ、ソクラテスさん！」と突っ込んでみたり。まさかこの歳で私が・・・、小説とは全く異なった読書体験をしているところです。

編集員(チバ アキオ)

ヨガの最後には、願うに当然値すると思われる存在や事象の幸せを願う。大切な人、一緒にヨガができたこと、時間を共にしている仲間…。そして、それと並列に「私の苦手な人や私が嫌いな人も幸せでありますように」とも願う。はじめは聞き間違いかと思った。しかし、繰り返しきくうちに、なんだか少しずつ少しずつ納得である。こうして苦手な人、嫌いな人の幸せを願うことで、実際にその思いを軽減できるとした取り組みもあるようだ。確かに「嫌い」と「幸せ」は真逆で、拮抗関係である。打ち消す効果、無効化する効果となり両方は成り立たないという構図もそうなのかもしれない。

そもそもヨガは体をほぐすものかと思ったら、それはただの一部でしかなかった。紀元前からの叡智は「私の苦手な人や私が嫌いな人の幸せ」も願う。こうしたテーマは「結合」であるという。身体と心の統一、大自然と人間の調和。…これは多層的にとらえるシステム論的理解ともよく似ているではないか。対人援助学マガジンも結合の具体化ともいえるのであろう。土に触れる、自然に近い距離で暮らす連載もあることが、またそんな思いを加速させる。

編集員(オオタニ タカシ)

何となく、編集後記に書いたら良さそうなことを執筆者短信に書いてしまった気もしています。何が短信に書くべき内容で、何が編集後記に書くべき内容か、よくわからなくなってくるというのが、誰にも共感されない編集員あるあるなのかもしれません。

人生 100 年時代という言葉が、編集会議で話題にあがりました。私は今 43 歳なので、ようやく人生を振り返るかどうかという程度ということになります。この 100 年の間に、時代もどんどん変化していくわけで、若いころに身につけた資格や知識を頼りに人生を走り切ろうと考えるのは、もはや非現実的かつ無謀な選択と言わざるを得ないのかもしれない。

何も変わらないものはない、と考えれば、自分自身の役割も変化していくと考えた方が自然です。小学校時代、忘れ物の多さと宿題をやらないことで有名だった私が、

今教職についているというのも、なんだかおかしな感じも巡り合わせです。人に教える、伝えることの難しさと面白さを、失敗と試行錯誤を繰り返しながら味わっている毎日です。

というわけで、読者のみなさま。読者から執筆者への役割代えもぜひご検討ください。必要なのはご自身の意思と決断だけです。ご連絡をお待ちしております！

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は

danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438

ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻49号

第13巻 第1号

2022年6月15日発行

<http://humanservices.jp/>

**第50号は2022年9月15日
発刊の予定です。**

原稿締切2022年8月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンルからの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪府中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

2022年5月、京都国際マンガミュージアムで、緊急展示する「平和への100の小さな扉」展に、本誌連載中の篠原ユキオから誘われた。彼は50年付き合いのマンガ仲間、2015年にはニューヨークのギャラリーで一週間ずつの個展をしたこともある。

私も元々はヒトコマ漫画を専門に描いていたのだが「木陰の物語」を描くようになった2000年頃から、徐々にヒトコマ漫画への意欲が減退して描かなくなった。

FECOという国際マンガ集団日本支部メンバーなのだが、ヒトコマ中心のその活動にも消極化していた。

今回の表紙マンガ、サインをみていただくと分かるが、描いたのは1976年である。「同人誌ぼむ」に「傭兵」シリーズとして描いた一枚だ。雇われた戦場でスナイパーが、故郷の母親に「母さん元気かい？僕は元気だ」と書いた後・・・という作品。

ロシア兵の母親達の思いのニュースが重なった。そして人間はいつまでたっても、男っぽい馬鹿が止められないのだなあと思った。私は勇ましがる奴が大嫌いだ。

告知

2022年6月1日から一ヶ月間、大阪梅田の商業施設NU茶屋町プラスで、「平和への130枚」展が行われている。そこには平和と家族がテーマの「木陰の物語（掛け軸版2作品）」も展示されている。関西の方、お時間があったら阪急梅田駅2分ほどの場所です。スマホで調べて、どうぞお出かけ下さい。

団士郎 (2022/6/15)